宮城県文化財調査報告書第128集

西前・町田遺跡

－国道 286 号線(茂庭工区)道路改良工事関係報告書－

昭和 63 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序　　文

われわれの祖先が残した生活、文化など一切の痕跡が文化財であります。このうち、地下に埋もれている遺物や遺構が埋蔵文化財と称されるものです。現在、宮城県では5,700余りの遺跡が知られていますが、最近の急激な土地開発の波にさらされ、存亡の危機に瀕している遺跡も少なくありません。当教育委員会では、一度破壊されれば元には返らない貴重なこの遺産を後世に伝えるため、広く県民への文化財保護思想の啓蒙はもちろんのこと、開発部局とも十分な協議をもってその保護・保存に努めています。

本報告書は、宮城県土木部道路建設課による一般国道286号線の道路改良工事に伴う仙台市西前・町田両遺跡の調査成果を収録したものです。

本書が研究者や関係者ばかりでなく一般の人々にも活用され、文化財の保護思想が少しでも浸透できれば大きな喜びであります。

最後に、協議・調整から発掘調査に至るまで多大な御協力を頂きました関係機関各位に厚く感謝申し上げます。

昭和63年3月

宮城県教育委員会教育長　　関本　朝吉

目　　次

序　文
1. 調査に至る経過 1
2. 遺跡の位置と環境 2
・自然環境 2
・周辺の遺跡 2
3.調査の方法と経過 3
4.発見された遺構と遺物 5
（1）竪穴住居跡 5
（2）掘立柱建物跡とピット群 10
（3）土壙 11
（4）その他の遺構 14
（5）表土出土の遺物 15
5. 考　察 20
6. まとめ 22

例　　言

1. 本書は国道286号線道路改良工事に係る西前・飯田遺跡の調査報告書である。
2. 調査は宮城県土木部(担当、宮城県仙台土木事務所)から依頼されて宮城県教育委員会が主体となり、文化財保護課が担当した。
3. 工事に係る埋蔵文化財のための協議や発掘調査にあたっては、宮城県仙台土木事務所、仙台市教育委員会から多大のご協力をいただいた。
4. 発掘調査および整理・報告書の作成に際しては、次の方々から指導、助言を賜った。
藤沼邦彦、小井川和夫、村山斌夫、笠原信雄（東北歴史資料館）
千葉孝弥（多賀城市教育委員会）、村田晃一（多賀城跡調査研究所）
佐々木隆(仙台市科学館)、藤村新一
5. 本書における土色についての記述には『新版標準土色帖』(1973年)を利用した。
6. 本番の第I図は建設省国土地理院発行の1/2.5万地形図「仙台西南部」を複製して利用した。

7. 本書は調査員全員が協議しながら菅原弘樹が執筆し、編集した。
8. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については宮城県教育委員会が保管し、求めに応じて公開している。

調　査　要　項

1. 遺跡名(遺跡記号・宮城県遺跡地名表番号)・所在地

　西前遺跡(ＫＭ・01065)仙台市茂庭字門野

　町田遺跡(ＫＬ・01066)仙台市茂庭字坂ノ下

2. 調査期間

　西前遺跡－発掘調査　昭和62年9月1日～9月2日

　町田遺跡－発掘調査　昭和62年8月31日～10月8日

3. 発掘調査面積

　西前遺跡－　300㎡（2,500㎡）

　町田遺跡－2,000㎡（3,000㎡）

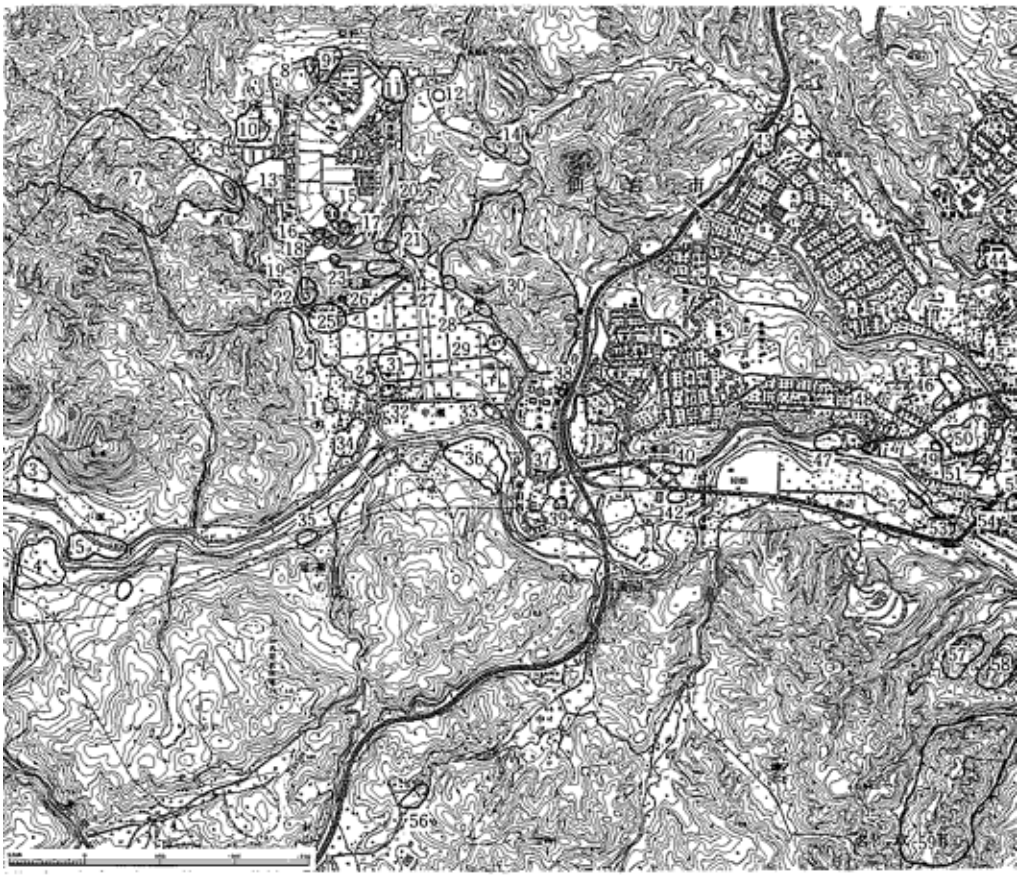
4. 発掘調査主体　宮城県教育委員会
5. 発掘調査担当者　宮城県教育庁文化財保護課

　調査員:進藤秋輝、加藤道男、佐藤則之、吉田雅之、菅原弘樹

6. 発掘調査協力機関　仙台市教育委員会、宮城県仙台土木事務所

1．調査に至る経過

宮城県道路建設課では以前から、昭和57年度から昭和63年度までに実施する一般国道286号線改良工事計画を持っていた。全路線のうち仙台市茂庭工区西半については昭和60・61年度で用地交渉を、61・62年度で文化財関係の調査を終え、62・63年度の2ケ年間で改良工事および舗装工事を施行するという計画であった。この工区の計画は昭和61年8月に具体的になったた



№	遺跡名	時代	№	遺跡名	時代	№	遺跡名	時代	№	遺跡名	時代
1	西前遺跡	縄文	16	根山B遺跡	縄文早・中～晩	31	新熊野遺跡	縄文中	46	北前遺跡	旧石器、縄文早～後、古代、近世
2	町田遺跡	古代	17	沼原C遺跡	縄文中・後	32	町北東遺跡		47	羽黒堂遺跡	縄文、古墳～平安
3	小塚西遺跡	縄文中	18	根山A遺跡	縄文後・晩、平安	33	中ノ巣遺跡	古代	48	羽黒堂前遺跡	縄文、古代
4	大貝中遺跡	縄文晩、古代	19	根山C遺跡	縄文後・晩、平安	34	新組遺跡	縄文、古代	49	山田上ノ台塚	不明
5	川添東遺跡	縄文早～晩	20	沼原A遺跡	縄文前～晩、弥生、平安	35	塩ノ巣遺跡	縄文、古代	50	山田上ノ台遺跡	旧石器、縄文早～後、古代、江戸
6	大貝下遺跡	縄文中	21	向根遺跡	縄文、古代	36	富田南西遺跡	古代	51	秀田遺遺跡	縄文、古代
7	茂庭大館	中世	22	茂庭西館	中世	37	上ノ原山遺跡	縄文早	52	西台遺跡	弥生、古代
8	梨野B遺跡	古代	23	茂庭峰館跡	中世	38	人来田A遺跡	縄文中、弥生	53	堀ノ内遺跡	古墳、古代
9	梨野C遺跡	縄文、古代	24	門野山田遺跡	縄文後・晩、弥生～古代	39	人来田B遺跡	古代	54	清太原西遺跡	縄文、平安
10	梨野D遺跡		25	峰岸遺跡	縄文中～晩	40	人来田C遺跡	縄文、古代	55	竹ノ内前遺跡	平安
11	梨野A遺跡	縄文早～晩、弥生～中世	26	本郷遺跡	縄文、古代	41	人来田遺跡	縄文中、弥生	56	ノマヤマ遺跡	
12	馬越石塚	近世	27	向根遺跡	平安	42	人来田東遺跡	縄文、古代	57	黒崎城跡	中世
13	カナクソ遺跡	中世、近世	28	向根横穴古墳群	古墳後	43	佐保山東遺跡	縄文、平安	58	小館（古館）跡	中世
14	梨野横穴群	古墳後	29	坂ノ下遺跡	古代	44	郭京平遺跡	縄文中、平安、中世	59	熊野堂大館跡	中世
15	沼原B遺跡	縄文中・晩、弥生	30	茂庭東館	中世	45	上野山遺跡	縄文			

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

め、同月28日には文化財との係りについての協議書が提出された。これを受けて当課では仙台市教育委員会とともに現地踏査を行った。その結果を踏まえて道路課とルートの検討をも含めて協議した結果、計画予定地内にかかる町田遺跡・西前遺跡の2遺跡については発掘調査が必要であり、当課が調査を担当することになった。

その後、茂庭工区東半にあたる仙台市人来田土地内での工事計画が62年2月26日に示された。そこで、3月18日に計画予定地内を分布調査した結果、それまで知られていた奈良・平安時代の集落跡と推定される仲ノ瀬遺跡のほかに、縄文時代早期末の土器が採集される上ノ原山遺跡が新たに発見され、この両遺跡についても62・63年度に確認調査・事前調査が必要となった。

ところが、茂庭工区東半については用地交渉が難航し、土地買収ができなかったため、今年度の調査からは除外され、持ち越されることになり、西半の町田・西前遺跡の調査を実施することにした。調査期間は8月31日から10月8日までで、執行委任を受けた予算額は6,000千円、使用額は2,173千円である。

西前遺跡の対象面積は2,500㎡、実質の調査面積は300㎡である。遺跡から外れているせいか遺構は全くなく、土師器の小破片が若干出土したにすぎない。

町田遺跡の対象面積は3,000㎡、実質の調査面積は2,000㎡である。ここからは後に詳述するように、縄文時代の土壙、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡のほか、多数の小規模な掘立柱建物跡が検出された。

2. 遺跡の位置と環境

自然環境

西前遺跡・町田遺跡は仙台市西南部、太白山の南西約2.5㎞に位置する。

仙台市西南部は、奥羽山系の一部である面白山地から東の宮城野海岸平野に向かって延びる茂庭・青葉山・高館丘陵と、これらの丘陵を開析しながら東流する名取川によって形成された鈎取洪積台地と呼ばれる河成段丘からなる。両遺跡は、名取川北岸の、まわりを茂庭丘陵と高館丘陵とに囲まれたこの洪積台地（仙台上町段丘）上に所在する。西前遺跡は台地を開析して名取川に注ぐ岩ノ川の西側、町田遺跡はその東側、標高約70㎜の緩斜面にそれぞれ立地している。

周辺の遺跡

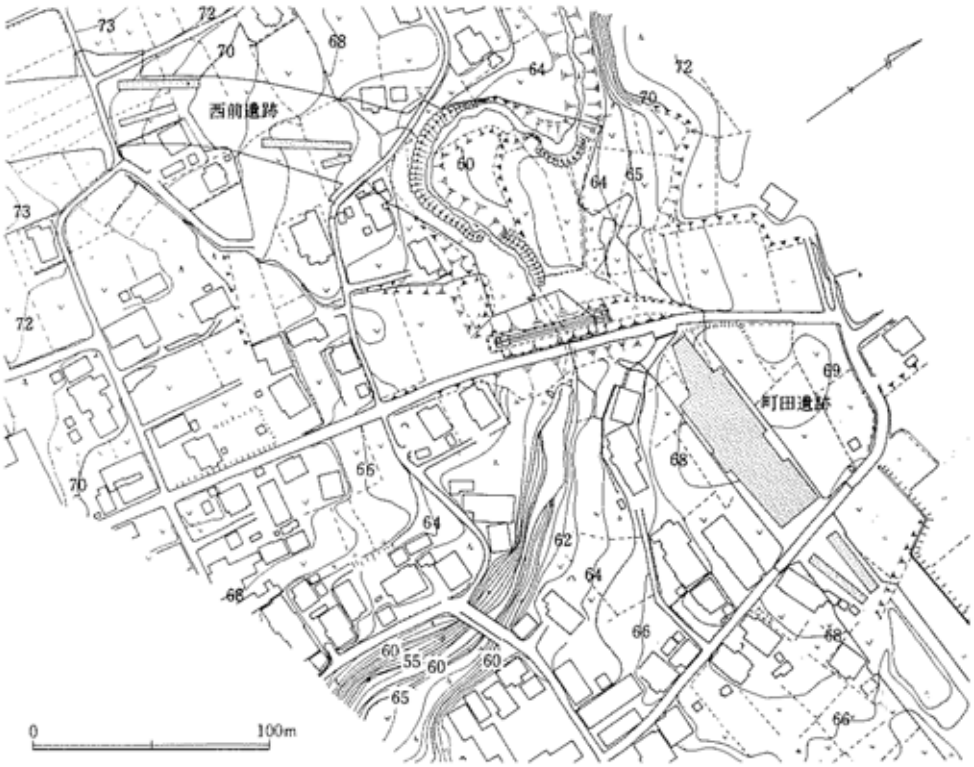
この周辺には旧石器時代から近世に至る遺跡が分布している。これらの遺跡の多くは、名取川下流の扇状地および自然堤防浴いに散在する遺跡群の立地・分布のあり方とは異なり、狭い段丘上、丘陵および丘陵末端の斜面上に立地し、その遺跡数も少ない。

これらの遺跡群については、その内容が把握されている遺跡は少ないが、段丘上の平坦もしくは緩斜面には縄文・平安時代に属する遺跡が多く分布している。調査された遺跡としては山田上ノ台・北前遺跡があり、前期旧石器に遡る石器群が検出される一方で、縄文・平安～中・近世における生活の場が明らかにされている。

また丘陵地帯に立地する遺跡群については、時期や遺跡の性格によって異なる分布を示しており、段丘上に立地する遺跡群とも様相を異にしている。すなわち縄文時代には、丘陵南北端の比較的平坦な所に居住域と考えられる遺跡(梨野Ａ遺跡)が、丘陵地内の斜面上には狩猟域と考えられる遺跡(沼原Ａ・嶺山Ａ・嶺山Ｂ遺跡)がそれぞれ分布し、平安時代になると丘陵地内の平坦な所を選んで鉄の生産を行っている(沼原Ａ遺跡)。また、茂庭丘陵をはじめ名取川中流域の丘陵地帯は、中世山城の集中地帯となっており、多くの城館跡（庭庭大館・西館・嶺館・東館など）が分布している。

3.調査の方法と経過

今回調査の対象となったのは、西前遺跡が路線敷にかかる中心杭№.108～№.113の範囲約2,500

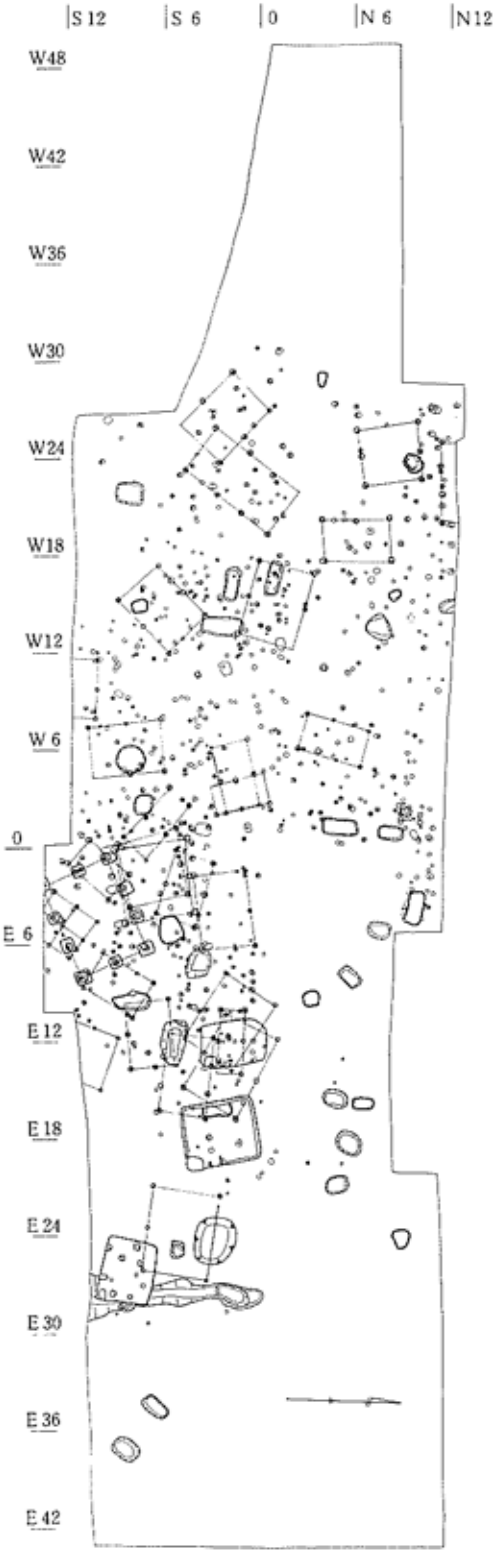


第２図　周辺の地形と調査区

㎡、町田遺跡が中心杭No.93～No.101の範囲約3,000㎡である。調査は、まず遺跡の範囲を確認するために、対象地区内に幅3～6mのトレンチを任意の長さで設定して行い、遺構および遺物が検出された際にその付近を拡張するという方法をとった。

その結果、西前遺跡では遺構は検出されず、土師器の小破片が微量出土したに過ぎなかった。このことから今回の調査対象地区は、遺跡の範囲外であると考えられた。

一方、町田遺跡では道路を挟んで調査区の東側（調査東区）では遺構、遺物を検出しなかったが、調査区の西側（調査西区）においては土壙および多数のピット群が確認された。このため調査西区においては中心杭No.97とNo.99＋6.575mを結ぶ直線を基準に、中心杭No.98を原点にして東西および南北にグリッドを設定し、ほぼ全面を調査した。その結果、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡29棟、土壙34基、焼け面2基、溝I条および多数のピット群を検出した。表土（耕作土）下が直ちに地山で、これらの遺構はいずれも地山で確認された。これらの遺構については遣り方を設け、1/20の平面図・土層断面図を作成し、写真を撮影した。その他の調査区については、平板測量を行って調査範囲の平面図を1/200で作成した。



第３図　遺構配置図

4.発見された遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

SI01住居跡（第4図）

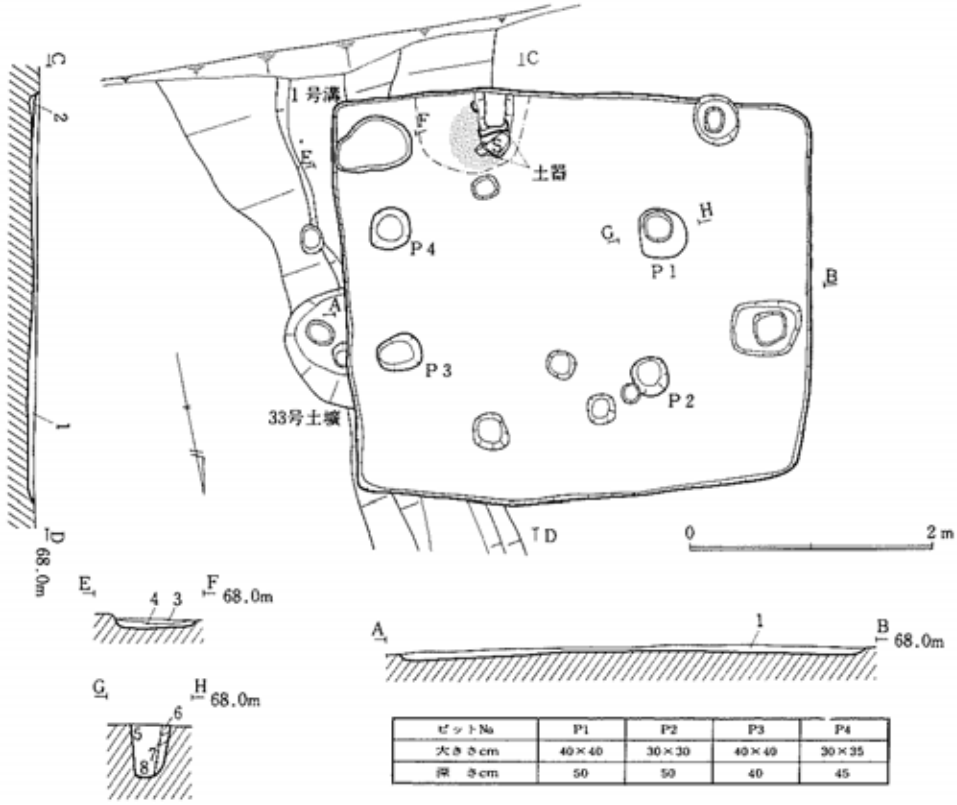
〔位置・重複〕E24～28、S6～10に位置する。SD01およびSK33を切り、SB02によって切られている。

〔平面形・規模・方向〕3.9×3.0mの長方形で、長軸の方向はN－80°－Wである。

〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がるが、削平が著しく残存する壁高は6cm程度である。

〔床面〕地山をそのまま床にしており、ごく平坦である。

〔柱穴〕住居に伴うピットはP1～4で、いずれも楕円形を呈する。P1において径約25cmの柱痕跡が確認された。

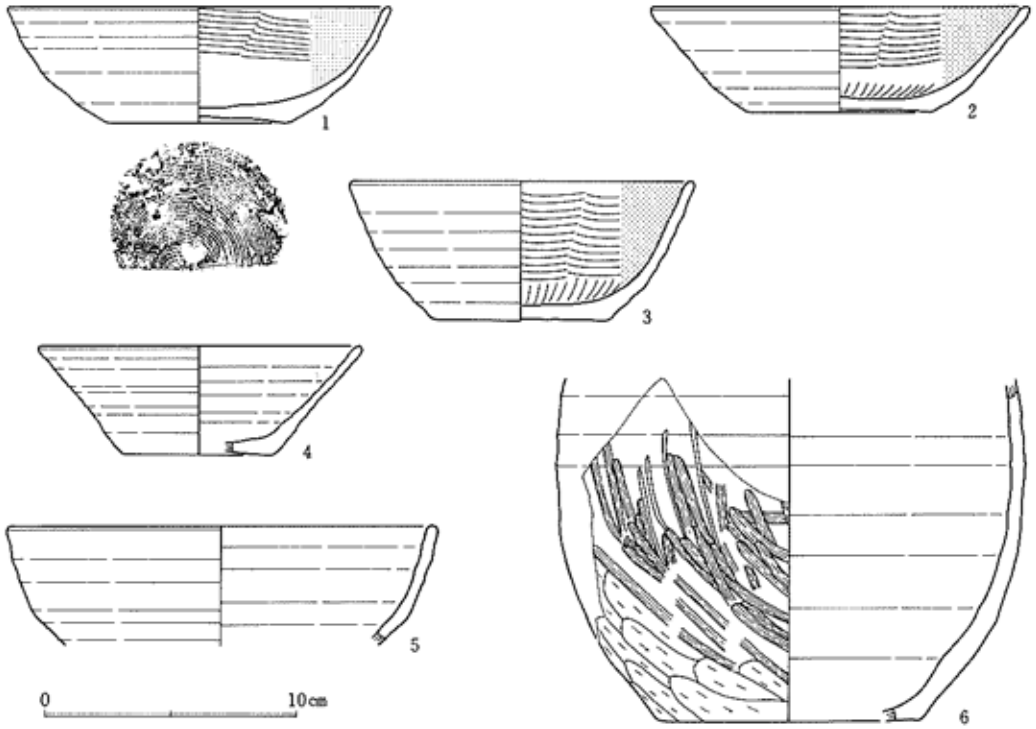


ピットNo	P1	P2	P3	P4
大きさcm	40×40	30×30	40×40	30×35
深　さcm	50	50	40	45

層　名	No	土　色	土　性	特　徴
住居跡内堆積土	1	暗褐色　10YR3/4	シ　ル　ト	灰白色火山灰を含む
カマド崩壊堆土	2	暗褐色　10YR3/3	シ　ル　ト	地山層を若干含む
ピット堆積土	3	黒褐色　10YR2/3	粘質シルト	焼土・炭化物を多く含む
	4	暗褐色　10YR3/4	シ　ル　ト	地山粒を含む

層　名	No	土　色	土　性	特　徴
ピット1柱痕跡	5	黒褐色　10YR2/3	粘質シルト	焼土・炭化物を多く含む
ピット1崩壊堆土	6	褐　色　10YR4/4	シ　ル　ト	地山粒を多く含む
	7	暗褐色　10YR3/3	粘質シルト	
	8	褐　色　10YR4/4	シ　ル　ト	地山粒を多く含む

第4図　ＳＩ01住居跡



No	出土層位	器種・器形	口径cm	底径cm	器高cm	特徴（外面：内面：底部）		
1	ピット堆積土	土師器・坏	15.2	7.0	4.6	ロクロナデ	ミガキ＋黒色処理	回転糸切り・再調整なし
2	ピット堆積土	土師器・坏	15.0	7.2	4.2	ロクロナデ	ミガキ＋黒色処理	回転糸切り・再調整なし
3	ピット堆積土	土師器・坏	13.7	6.8	5.5	ロクロナデ	ミガキ＋黒色処理	手持ちヘラケズリ
4	ピット堆積土	赤焼土器・坏	12.8	5.8	4.3	ロクロナデ		回転糸切り・再調整なし
5	ピット堆積土	赤焼土器・坏	17.0			ロクロナデ	ロクロナデ	
6	カマド側壁内部	土師器・甕		10.2		ロクロナデ＋手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	手持ちヘラケズリ

第５図　ＳＩ01住居跡出土遺物

〔カマド〕南壁東寄りに付設されている。本体は西側の側壁がわずかに残るのみである。本体より大きめの掘り方を施し、土師器の甕(第5図6)および礫を芯としてそれに粘土を貼り付けて構築している。底面は全体に焼けて赤色化している。

〔その他の施設〕カマドのすぐ東側に約40～60㎝、深さ約10㎝の楕円形の浅い皿状のピットがある。

〔堆積土〕暗褐色土が一枚あるのみであるが一部分的に灰白色火山灰を含むことからそれ以前に住居は廃絶したものと考えられる。

〔出土遺物〕カマドの側壁内部から土師器の甕（第5図6）が、カマド東側のピット堆積土中から土師器の坏（第5図1～3）・甕、赤焼土器の坏（第5図4・5）が出土している。この他に堆積土中から須恵器の甕などの破片が出土している。土師器はいずれもロクロを使用し、坏底部に調整が施されるものもある。

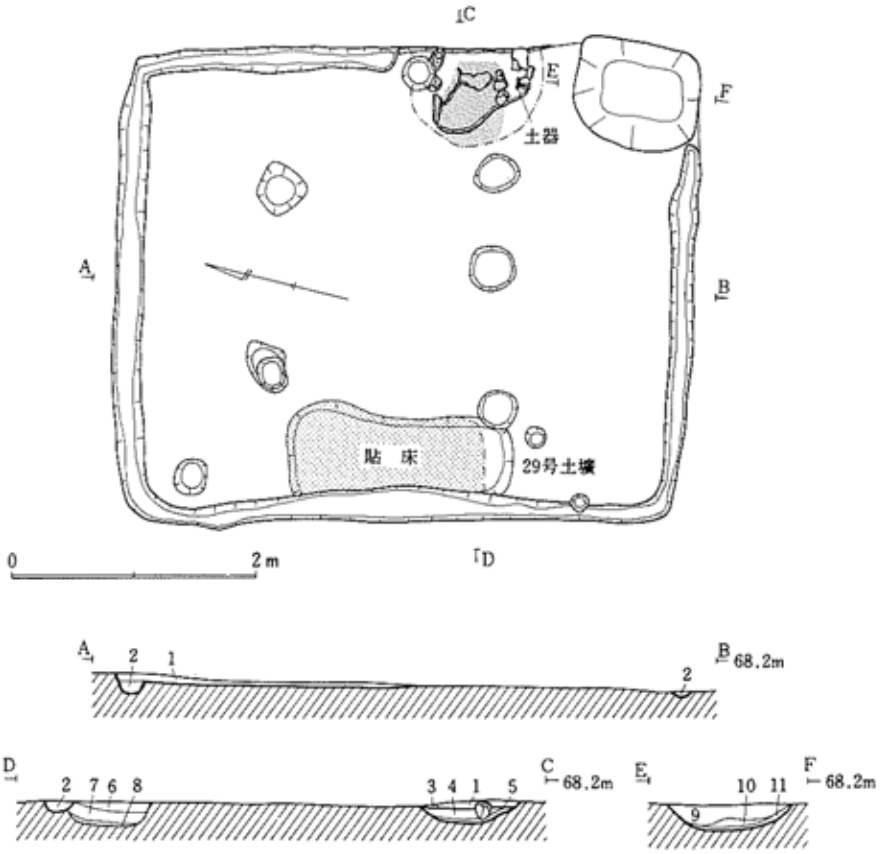
SI02住居跡(第6図)

〔位置・重複〕E15～20、N1～S5に位置する。SK29を切り、SB05・06によって切られている。またSI03と近接した位置にあるが、後述する遺物の接合関係からこれより新しい可能性が強い。

〔平面形・規模・方向〕4.4×3.8mの長方形で、長軸の方陶はN－10°－Wである。

〔壁〕削平が著しくほとんど残存しないが、北壁ではほぼ垂直に立ち上がる。残存する壁高は周溝底面から約20cmである。

〔床面〕大部分は地山を床面としているが、SK29と重なる部分には貼床が認められる。床面はごく平坦である。



層　名	No	土　色	土　性	特　徴
住居跡内堆積土	1	暗褐色　7.5YR3/4	シ　ル　ト	
周溝内堆積土	2	黒褐色　7.5YR3/2	シ　ル　ト	炭化物を含む
カマド崩壊土	3	褐　色　7.5YR4/4	粘質シルト	粘性ややある
カマド燃焼層土	4	赤褐色　5YR4/6	シ　ル　ト	赤色化顕著、地山礫多い
	5	褐　色　10YR4/4	シ　ル　ト	地山礫多い
住居跡貼床	6	暗褐色　10YR4/4	シ　ル　ト	地山土を含み、しまりある

層　名	No	土　色	土　性	特　徴
29号土壙埋積土	7	暗褐色　10YR3/3	粘質シルト	焼土・炭化物を多く含む
	8			炭化物層
ピット埋積土	9	暗褐色　7.5YR3/3	粘質シルト	粘性あり
	10	褐　色　7.5YR4/4	粘質シルト	粘性あり
	11	暗褐色　7.5YR3/3	粘質シルト	炭化物を含む、粘性あり

第6図　ＳＩ02住居跡

〔周溝〕壁沿いに巡り、幅15～30㎝、深さ10～20㎝である。

〔カマド〕東壁南寄りに付設されている。本体は側壁の一部と思われる焼けた礫が残存するのみである。底面はいくぶん窪み、全体に焼けて赤色化している。

〔その他の施設〕カマドのすぐ南側に約1.0×0.9m、深さ約20㎝のほぼ方形のピットがある。

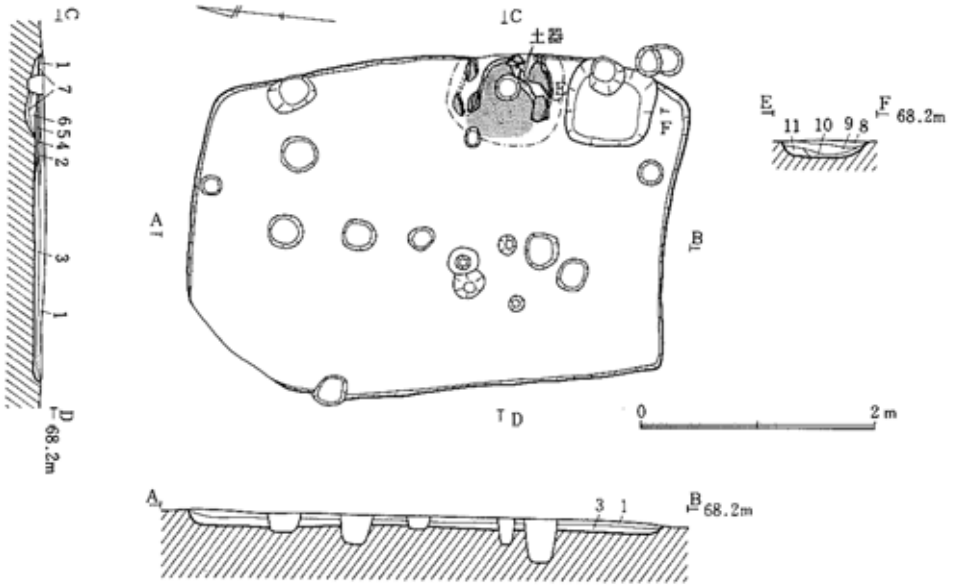
〔堆積土〕北側部分に暗褐色土が一枚わずかに残るのみである。

〔出土遺物〕堆積土、カマド、カマド南側のピット堆積土中から土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕が出土している。この中で堆積土出土の土師器の甕はSK29堆積土およびSI03のカマド側壁内部出土の土器と接合関係にあり、SI03→SI02という新旧関係が想定される。またわずかではあるがこの他にも堆積土中から縄文土器破片と石器(第14図2・5)が出土している。これらは破片資料のみで全体の特徴の分かるものはないが、土師器はいずれもロクロを使用している。

SI03住居跡(第7図)

〔位置・重複〕E10～E14、N1～S4に位置し、SB05～08によって切られている。

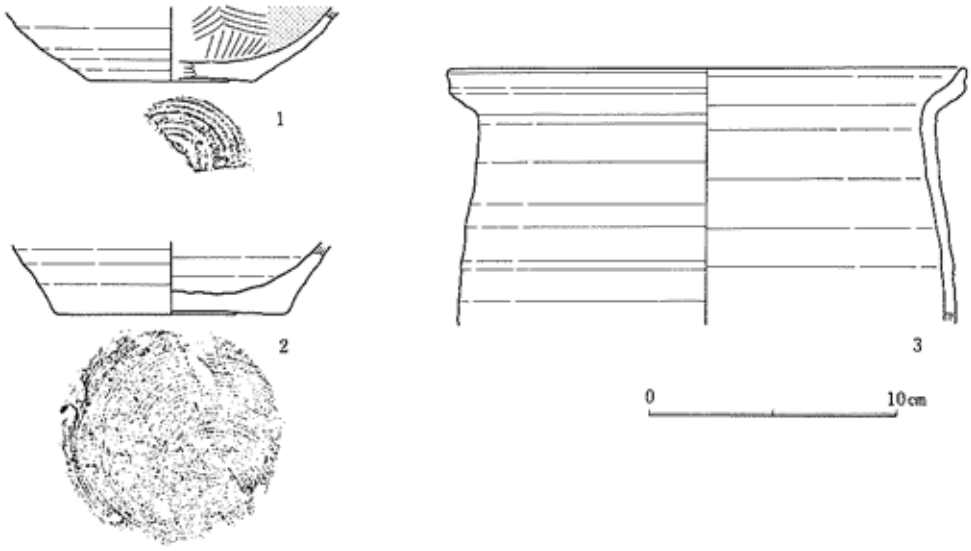
〔平面形・規模・方向〕住居跡の北西部が削平されているが、長方形を基調としている。規模は



層名	No	土色	土性	特徴
住居跡内堆積土	1	暗褐色 10YR3/3	シルト	焼土粒・炭化物を若干含む
カマド崩壊土	2	暗褐色 10YR3/2	粘質シルト	地山・焼土塊を含む
住居跡内堆積土	3	暗褐色 10YR3/4	シルト	地山礫を含む
カマド内堆積土	4			炭化物層
	5	暗褐色 7.5YR3/3	粘質シルト	焼土粒を多く含む
カマド崩壊土	6	赤褐色 5YR4/6	シルト	赤色化顕著、地山礫多い

層名	No	土色	土性	特徴
カマド崩壊土	7	褐色 10YR4/4	シルト	しまりなし
ピット堆積土	8	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山粒を含む
	9	暗褐色 10YR3/4	シルト	焼土塊を含む
	10	暗褐色 10YR3/3	粘質シルト	焼土粒・炭化物を含む（粘性あり）
	11	褐色 10YR4/4	粘質シルト	粘性あり

第7図　SI03住居跡



No	出土層位	器種・器形	口径cm	底径cm	器高cm	特徴（外面：内面：底部）		
1	住居内堆積土	土師器・坏		6.6		ロクロナデ	ミガキ＋黒色処理	回転糸切り・再調整なし
2	床面	土師器・甕	21.0			ロクロナデ	ロクロナデ	
3	カマド側壁内部	土師器・甕		9.2		ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り・再調整なし

第８図　ＳＩ03住居跡出土遺物

4.0×2.3m、長軸の方向はN－10°－Wである。

〔壁〕ほぼ垂直に立ち上がる。残存する壁高は約10cmである。

〔床面〕地山をそのまま床にしており、ごく平坦である。

〔カマド〕東壁南寄りに付設されている。本体は両側壁がわずかに残るのみである。本体より大きめの掘り方を施し、土師器の甕(第8図3)および礫を芯としてそれに地山土を貼り付けて構築しているが、礫が露出し直接加熱を受けている部分もある。カマドの燃焼部には二枚の堆積土(第3・4層)があり、底面はいくぶん窪み、全体に焼けて赤色化している。

〔その他の施設〕カマドのすぐ南側に約70×60cm、深さ15cmのほぼ方形のピットがある。

〔堆積土〕自然流入土が二枚(第1・5層)認められた。

〔出土遺物〕カマドの側壁内部から土師器の甕（第8図3）が、堆積土・カマド堆積土およびカマド南側のピット堆積土(第6・8層)中から土師器の坏（第8図1）・甕(第8図2)、須恵器の坏・甕・蓋、赤焼土器の坏、縄文土器破片が出土している。これらの中で土師器は、いずれもロクロを使用している。

（2）掘立柱建物跡とピット群

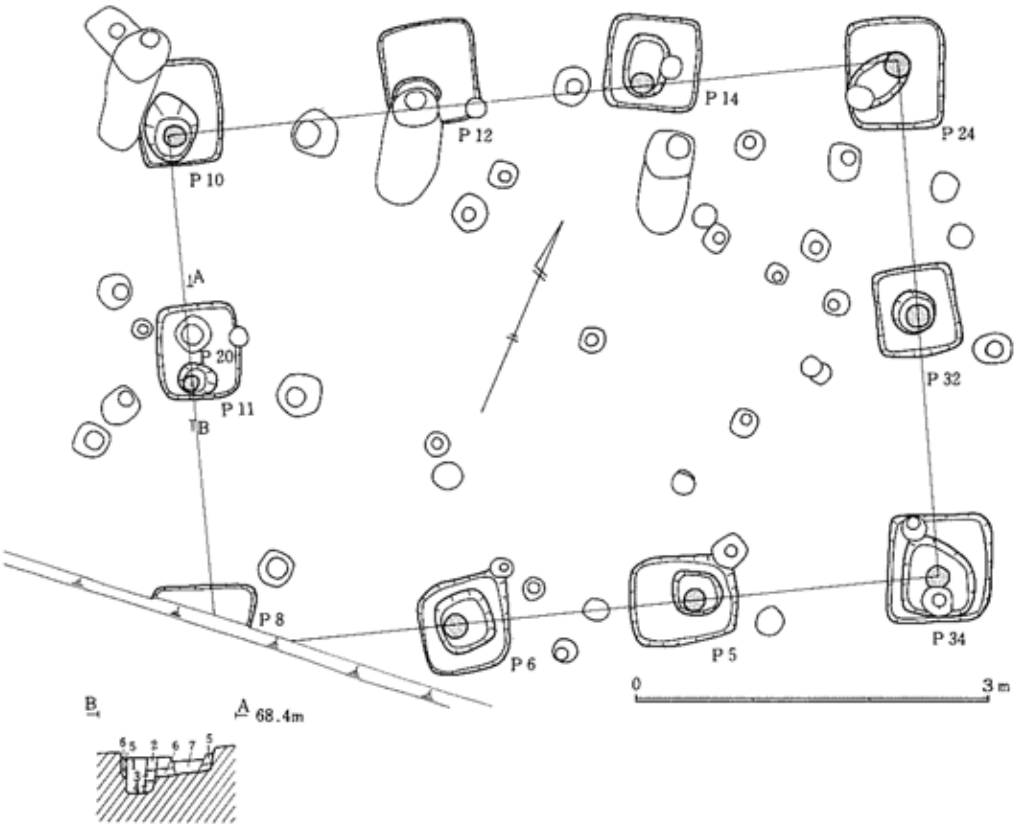
今回の調査において合計29棟の掘立柱建物跡が確認された。これらは建物の規模および柱穴の特徴から二つの建物群に分けることができる。すなわち、建物の規模が大きく、柱穴が方形ないし長方形を基調として大きいA群(SB01A・B)と建物の規模が小さく、柱穴が円形ないし楕円形を基調として小さいB群(SB02～28)である。

SB01A・B建物跡(第9図)

〔位置・重複〕E0～9、S6～12に位置する。同位置での建て替え(SB01A→SB01B)が認められる。またSB12によって切られている。

〔規模・方向〕SB01Bで、桁行3間(総長6.1m、柱間寸法2.0～2.1m)、梁行2間(総長4.4m、柱間寸法2.2m)の東西棟建物跡で、その方向はN－65°－Eである。

〔柱穴〕SB01Aのそれは一辺が70～90cm、深さ15～20cmで、柱痕跡はいずれもSB01Bによっ



層名	No.	土色	土性	特徴
1B建物跡柱痕跡	1	暗褐色 10YR3/3	粘質シルト	焼土粒・炭化物を若干含む
1B建物跡堀方埋土	2	暗褐色 10YR3/4	シルト	地山粒を多く含む
	3	暗褐色 10YR3/4	粘質シルト	地山土塊を含む
	4	褐色 10YR4/4	シルト質粘土	地山土からなる、粘性強い
1A建物跡堀方埋土	5	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山土を多く含む
	6	褐色 10YR4/6	粘質シルト	地山土を含み、粘性あり
P20埋土	7	黒褐色 10YR3/2	シルト	地山粒を多く含む

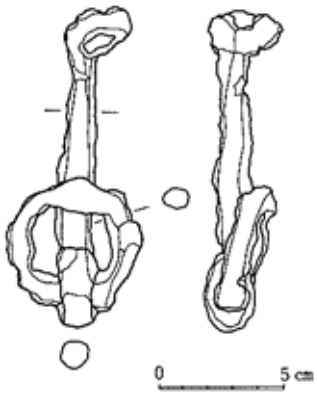
第9図　SB01A・B建物跡

て壊されている。SB01Bのそれは30～70㎝の楕円ないし不整方形、深さは35～50㎝で、SB01Aよりも深い。柱痕跡は径20㎝である。

〔出土遺物〕ロクロ使用の土師器の坏の破片が出土している。

SB02～28建物跡(第10図)

〔位置・重複〕E27～W30ラインに位置する。SI01～03、SB01A・Bよりも新しく、またいくつかの建物相互でも重複が認められる。〔規模・方向〕全体が確認できたもので1×1間の建物が2棟、2×1間が17棟、2×2間が1棟、3×1間が3棟で、桁行総長も3.5～5.0m、梁行総長が2.0～4.0m、床面積が20㎡以下と小規模のものが多い。建物の方向には大まかにみて、①南北棟で西に5～15°、東西棟で東に75～80°傾くもの、②南北棟で東に15°、東西棟で西に75～90°傾くもの、③南北棟で西に30～40°、東西棟で東に55～60°傾くものがある。



第11図　馬　具

〔柱穴〕いずれも掘り方が20～40㎝、柱痕跡が10～15㎝程度と小さい。深さは10㎝前後から70㎝と建物ごとにばらつきがある。

〔出土遺物〕土師器、須恵器、縄文土器の細片、砥石(第14図7)、馬具(鉄製:轡の鏡板と引手部分、第11図)が出土している。

その他各建物ごとの規模、方向、柱穴等の詳細については第1表に示した。

その他のピット群

掘立柱建物跡として組み合わなかったものの柱痕跡を持ち、ピットの大きさ、深さ、埋土ともSB02～28を構成する柱穴と同様のものが多数ある。しかもこれらの中には直線的に並ぶピット列もいくつか認められることから、これらの中には掘立柱建物跡として組み合う柱穴も含まれている可能性がある。出土した遺物は少なく、しかもいずれも破片であるが、ピット掘り方から古瀬戸の卸皿(第13図15)、中世陶器の擂鉢（第13図14）、土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕、縄文土器（第13図3・4）、石匙（第14図3）が出土している。

（3） 土 壙

土壙は34基確認された。これらは、形態的な特徴から大まかに以下の4つのタイプに分類することができる。

a:長方形もしくは長楕円形で壁が直立気味に放ち上がり、底面が平坦なもの。

SK02.08.13.18.19.25.26.28.29.31.32.34

b:方形もしくは楕円形で壁が直立あるいは急角度で立ち上がり、底面が平坦なもの。

第１表　掘立柱建物跡（SB01～28）一覧表

建物No.	規模（間）	重複関係	方向	柱間寸法（m） 桁行（東・南から）	柱間寸法（m） 梁行（東・南から）	床面積（m²）	柱穴の形	柱穴の規模cm	柱痕跡規模cm	深さcm	出土遺物
SB01A	3×2	→SB1B	N－65°－E	南(6.1) 北 6.1	東(4.4) 西 4.4	26.8	方形 長方形	70～90	15	15～20	土師器坏破片(p 11)
SB01B	3×2	SB01A→SB12	N－65°－E	南(6.1)＝2.1＋2.0＋(2.2) 北6.1＝2.1＋(2.0)＋(2.0)	東(4.4)＝2.2＋2.2 西4.1＝(2.2)＋2.2	26.8	楕円形 不整方形	30～70	20	35～50	
SB02	2×1	SI01→	N－85°－W	南 5.2＝2.6＋2.6 北 5.2＝(2.6)＋(2.6)	東 4.0 西 4.1	21.3	円　形	20～25	15	30	
SB03	2以上×1		N－29°－E	東 西 1.6<	南 北 3.4		円　形	20～25			
SB04	2×2	→SK15 SK11との関係は不明	N－81°－E	南(4.1)＝2.1＋(2.0) 北 4.1＝(2.1)＋(2.0)	東 3.0＝1.5＋1.5 西(3.0＝1.5＋1.5)	12.3	ほぼ円形	25	10～15	30	
SB05	3×1	SI02、03、SK29→ SK15との関係は不明	N－86°－W	南(4.9)＝1.5＋1.8＋(1.6) 北 5.0＝1.5＋1.8＋1.7	東 2.9 西(2.9)	14.5	円　形	30～40	10～15	30～50	
SB06	2×1	SI02、03→	N－62°－W	南 5.2＝2.5＋2.7 北 5.5＝2.6＋2.9	東 3.8 西 3.6	20.9	円　形	15～30	10～15	25～50	
SB07	2×1	SI03→	N－90°－W	南(4.0)＝(2.0)＋2.0 北 4.0＝2.1＋1.9	東(1.5) 西 1.5	6.0	隅丸方形	20～30	15	15～40	
SB08	2×1	SK15との関係は不明	N－58°－W	南(4.8)＝(2.3)＋2.5 北 4.8＝2.3＋2.5	東(3.6) 西 3.6	17.3	円・楕円	25～30	10～15	30～40	須恵器甕、縄文土器細片（P2）
SB09	1×1		N－30°－E	東 3.5 西 3.5	南 2.5 北 2.5	8.8	ほぼ円形	20～25	10	25	
SB10	2以上×2 総柱建物		N－32°－E	東 3.2< 西 3.2<1.6＋1.6	南 北 2.9＝1.4＋1.5		ほぼ円形	20～25	10～15	20	
SB11	1×1		N－40°－E	東 3.3 西 3.2	南 1.9 北 2.0	6.6	隅丸方形	30～35	10～15	30	
SB12	2×1	SB01、13、15→	N－81°－E	南 4.6＝2.3＋2.3 北 4.6＝2.3＋2.3	東 4.2 西 4.2	19.3	隅丸方形	30～40	15～20	60～70	土師器、縄文細片（P54）、馬具（P53）
SB13	2×1	→SB12	N－77°－E	南 4.0＝(2.0)＋(2.0) 北 4.1＝1.9＋2.2	東 3.7 西 3.7	15.2	ほぼ円形	30	10～15	25～50	須恵器坏細片（P49）
SB14	2×1	SK09→	N－75°－W	南 4.1＝2.0＋2.1 北 4.1＝2.1＋2.0	東 2.5 西 2.5	10.3	ほぼ円形	25～30	10～25	40～70	
SB15	2×1	→SB12	N－81°－E	東 4.6＝2.2＋2.4 西 4.7＝2.2＋2.5	南 3.2 北 3.2	15.0	円・楕円	20～30	10～15	15～30	砥石（P48）
SB16	2×1		N－54°－W	東 4.2＝1.9＋2.3 西 4.1＝1.8＋2.3	南 2.0 北 1.7	8.4	ほぼ円形	20～30	10～15	15～40	須恵器甕細片（P25）
SB17	2×1		N－15°－W	東 3.3＝1.6＋1.7 西(3.4)＝(1.6)＋1.8	東(2.0) 西 2.0	6.6	楕円形	25～30	10～15	10～15	
SB18	2×1		N－77°－E	南 4.1＝2.0＋2.1 北 4.1＝1.9＋2.2	東 2.1 西 2.2	9.0	ほぼ円形	25～30	10～15	10～20	
SB19	3×1		N－15°－E	東 4.0＝1.3＋1.2＋1.5 西 4.0＝1.6＋1.3＋1.1	南 2.2 北 2.3	9.2	ほぼ円形	20～30	10～15	30	土師器坏、須恵器甕細片（P18、31）
SB20	2×1	SK20→	N－10°－W	東(4.4)＝(2.3)＋2.1 西 4.4＝2.3＋2.1	南(2.2) 北 3.2	14.1	円・楕円	20～30	10～15		
SB21	2×1以上		N－ 3°－E	桁行or梁行 北 3.6＝1.8＋1.8			円　形	20	10		
SB22	2×1	SK19→	N－42°－E	南 4.6＝2.3＋2.3 北 4.2＝2.0＋2.2	東 3.2 西 3.2	14.7	ほぼ円形	25～30	15	35～40	土師器坏、須恵器甕細片（P36）
SB23	2×1	SK19→	N－75°－W	南 4.7＝2.4＋2.3 北(4.8)＝(2.5)＋2.3	東(3.5) 西 3.5	16.5	ほぼ円形	25～30	10～15	20	
SB24	2×1		N－ 5°－W	東(4.1)＝(2.0)＋(2.1) 西 4.1＝2.0＋2.1	南 2.6 北 2.6	10.7	円・楕円	30～40	15～20	25～35	
SB25	2×1		N－80°－E	南 3.5＝1.8＋1.7 北 3.5＝1.7＋1.8	東 3.5 西 3.7	13.0	楕円形	30～40	15	15～25	
SB26	3×1以上		N－ 3°－W	桁行or梁行 南 5.0＝1.8＋1.7＋1.5			隅丸方形	30～40	10～15	40～70	
SB27	3×1		N－32°－E	東 6.5＝2.5＋1.8＋2.2 西(6.5)＝2.6＋2.0＋(1.9)	南 3.2 北(3.2)	20.8	隅丸方形	30	10～15	15～40	
SB28	2×1		N－54°－W	南(4.6)＝(2.0)＋2.6 北 4.4＝2.2＋2.2	東(3.4) 西 3.2	14.1	隅丸方形	30	15	15～30	

（→は新旧関係を表し、右の遺構が新しいことを示す）

SK01.03.05.06.07.12.14.16.17.21.22.23.33

C:円形で壁が比較的急角度で立ち上がり、壁および底面に焼面を持つもの。

SK20

D:その他の不整形なものや壁が不明瞭なもの。また底面に凹凸があるもの。

SK04.09.10.11.15.24.27.30

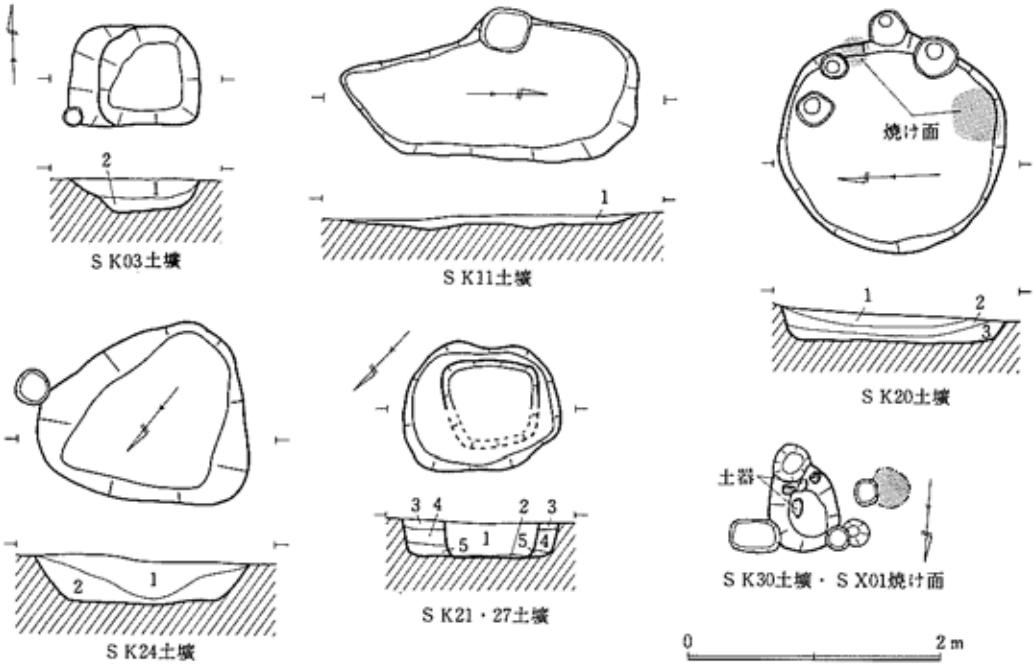
しかし、これらの中で、遺物が出土しているものは少なく、時期および性格を特定できるものは少ない。ここでは遺物が出土した土壙のみを記述し、その他については規模などを第2表に示した。

〈aタイプ〉

SK29土壙(第6図)

〔位置・重複〕E16、S2～3に位置する。S102に切られ、その貼床の範囲とほぼ一致する。

〔規模〕長軸1.8m、短軸0.9m、深さ20cm



層名	No.	土色	土性	特徴
3号土壙堆積土	1	極暗褐色7.5YR2/3	粘質シルト	炭化物を若干含む
	2	暗褐色 7.5YR3/4	シルト	
11号土壙堆積土	1	暗褐色 7.5YR3/3	シルト	地山礫を含む
20号土壙堆積土	1	暗褐色 7.5YR3/3	シルト	遺物（破片）を含む
	2	褐色 7.5YR4/3	シルト	
	3	褐色 7.5YR4/4	粘質シルト	粘性あり

層名	No.	土色	土性	特徴
21号土壙堆積土	1	褐色 7.5YR4/4	粘質シルト	粘性あり、しまりなし
	2			薄い炭化物層
27号土壙堆積土	3	暗褐色 7.5YR3/4	シルト	
	4	暗褐色 7.5YR3/3	シルト	地山粒を多く含む
	5	褐色 10YR4/4	粘質シルト	粘性あり
24号土壙堆積土	1	暗褐色 7.5YR3/3	シルト	
	2	褐色 10YR4/6	シルト	地山礫を多く含む

第12図　土壙、焼け面

〔出土遺物〕土師器の坏・甕(第13図13)、縄文土器（第13図6・7）が出土している。
<bタイプ>
SK03土壙(第12図)
〔位置〕E25、S4～5に位置する。
〔規模〕長軸1.0m、短軸0.7m、深さ30cm
〔出土遺物〕土師器の坏(回転糸切り・再調整なし)・甕、須恵器の坏が出土している。
SK21土壙（第12図）
〔位置・重複〕W24、N10に位置し、SK27を切っている。
〔規模〕0.7×0.7(?)m、深さ30cm
〔出土遺物〕炭化物層の直上付近から、ヒトの頭蓋骨および四肢骨の破片と推定される骨片と六道銭(寛永通宝・第14図8)が出土している。
<cタイプ>
SK20土壙(第12図)
〔位置・重複〕W6、S8に位置し、SB20によって切られている。
〔規模〕径1.7mの円形で、深さ20cm
〔出土遺物〕比較的遺物が多く、土師器の坏(回転糸切り・再調整なし)・甕(第13図12)、須恵器の坏・甕および石器(第14図6)が出土している。
<dタイプ>
SK11土壙（第12図）
〔位置・重複〕E9、S6～9に位置し、SB04と重複するが新旧関係は不明である。
〔平面形・規模〕長軸2.4m、短軸1.2m、深さ10cm
〔出土遺物〕土師器の坏（第13図11）・甕、須恵器の甕が出土している。
SK24土壙(第12図)
〔位置〕W13～14、N7～9に位置する。
〔規模〕長軸1.7m、短軸1.5m、深さ35cm
〔出土遺物〕須恵器、縄文土器(第13図5)が出土している。

（4）その他の遺構

その他には焼け面（SX01、02）2基、溝(SD01)1条がある。SX01は、W3N9付近に位置する径30cm程の焼け面である。この性格については、大きさや東側約30cmのところに0.7×0.5mの長楕円形、深さ約5cm程の皿状に窪む土壙（SK30）があることから考えて、住居跡のカマド燃焼部底面である可能性が高い（第12図）。また、カマド脇に付設されるピットに相当

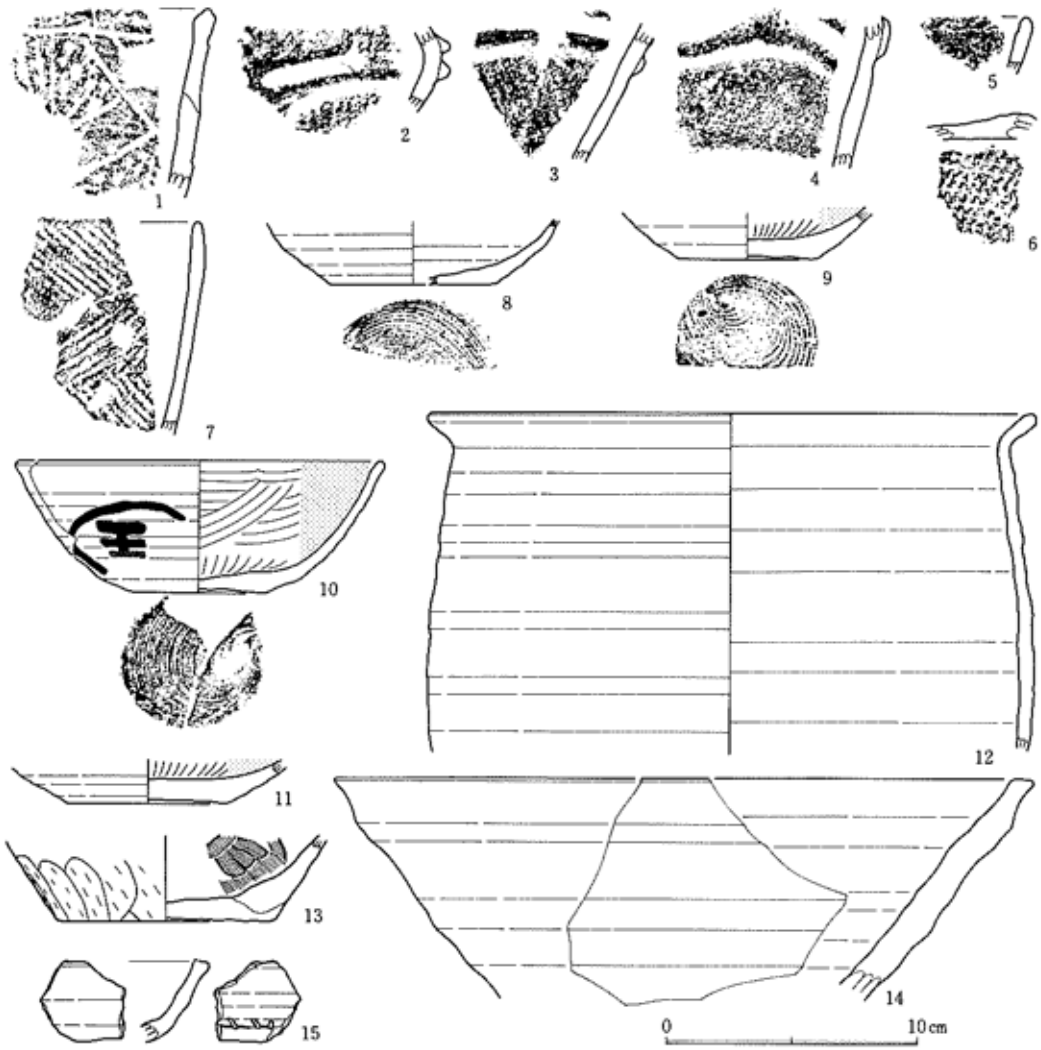
第２表　土壙一覧表（但し、本文中に記載したものを除く）

No	位置	重複関係	平面形	大きさm	深さcm	壁の状況	底面	No	位置	重複関係	平面形	大きさm	深さcm	壁の状況	底面
1	E37.S8		楕円形	1.7×1.2	90	斜め・急	平坦	17	W15.S7		方　形	1.0×0.8	10	斜め・緩	平坦
2	E34.S6		長方形	1.7×0.9	75	直立気味	丸底	18	W16.S2		長方形	2.1×0.9	30	直立気味	平坦
4	E24.N9		不整形	1.2×1.1	50	直立気味	平坦	19	W14.S2	→SB22、23	長方形	2.6×1.1	35	直立気味	平坦
5	E21.N6		方　形	1.4×1.1	75	直立気味	平坦	22	W22.S8		方　形	1.6×1.3	40	直立気味	平坦
6	E18.N6		楕円形	1.7×1.4	85	斜め・急	平坦	23	W15.N9		方　形	0.7×0.6	25	斜め・急	平坦
7	E15.N6		長方形	1.5×1.1	55	直立気味	平坦	25	E3.N10		長方形	2.0×0.9	25	直立気味	平坦
8	E16.N7		長方形	1.4×0.7	55	直立気味	平坦	26	W15.N12		長方形	?×0.8	70	斜め・急	丸底
9	E7.S3	→SB14	不整形	1.9×1.3	60	斜め・急	丸底	27	W24.N10		不整形	1.2×1.0	30	斜め・急	平坦
10	E5.S5		方　形	1.7×1.5	10	不明瞭	平坦	28	W17.N1		長方形	2.1×0.8	25	直立気味	平坦
12	E9.N3		方　形	1.0×1.0	40	直立気味	平坦	31	W1.N2		長方形	2.2×1.0	35	直立気味	平坦
13	E8.N6		長方形	1.4×0.9	30	斜め・急	平坦	32	W1.N9		長方形	1.5×0.9	35	直立気味	平坦
14	E5.N8		楕円形	1.4×1.0	45	直立気味	平坦	33	E28.S8	SD01→	楕円形	1.6×1.0	20	斜め・急	平坦
15	E12.S5	SB04、05、08→	楕円形	2.7×1.6	100	斜め・急	凹凸	34	E28.S1	SD01→	長方形	2.2×1.0	60	斜め・急	平坦
16	W3.S7		方　形	1.3×1.1	30	直立気味	平坦								

すると思われるSK30からは、墨書土器を含むロクロ使用の土師器坏(第13図9～10)が出土している。墨書文字については「王」の文字を丸く囲ったものである可能性が高い(注)。SX02は、W14N10付近に位置する径50×40cmの長楕円形の焼け面で、時期、性格については不明である。SD01は、SI01とSK33・34に切られる幅0.8～1.2m、深さ約0.5mの南北に延びる溝である。遺物はなく、時期は不明である。

(注)東北歴史資料館の藤沼邦彦・大橋俊夫両氏の御教示による。

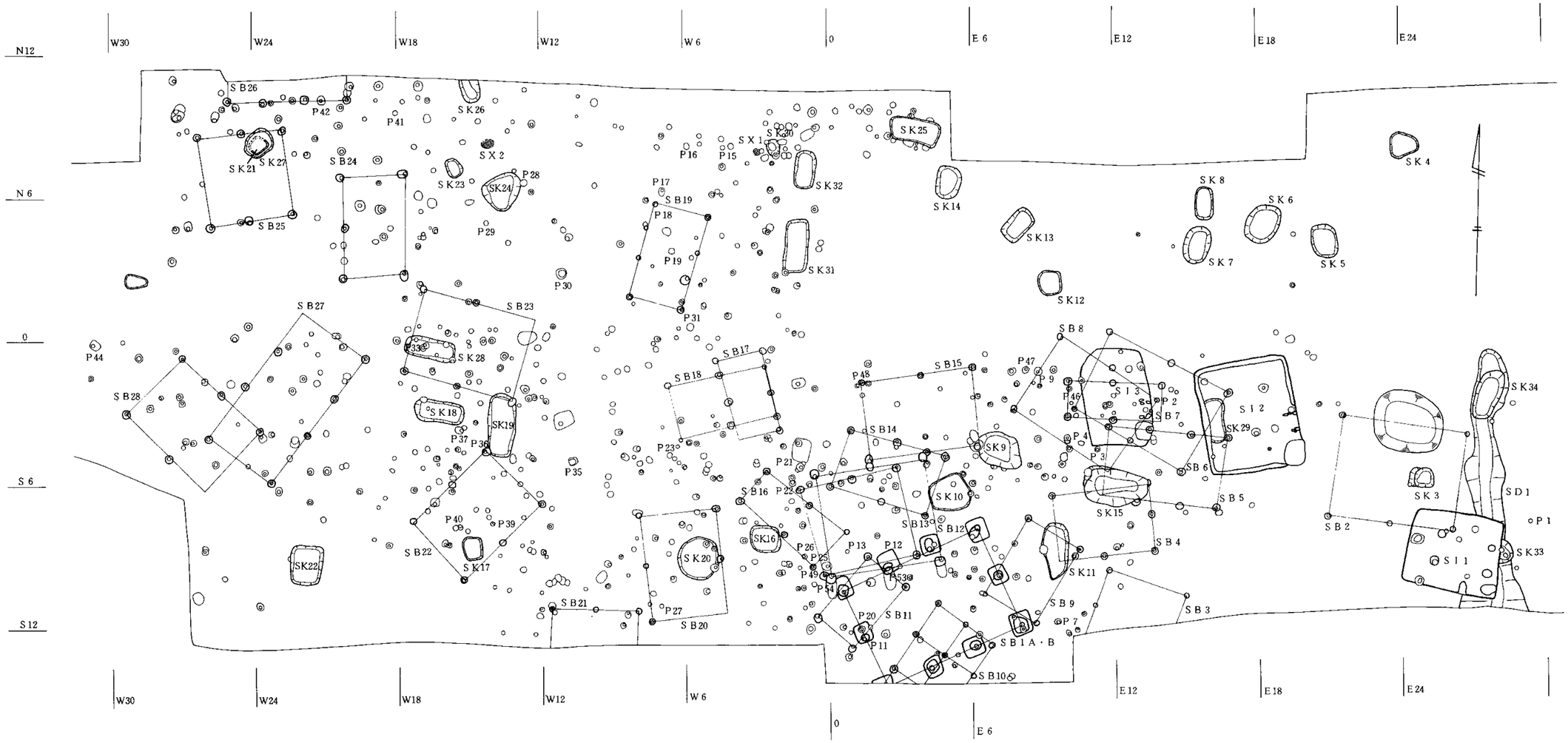
（5）　表土出土の遺物には、土師器の坏・甕、須恵器の甕、赤焼土器の坏（第 13 図 8）、縄文土器(第13図1・2)および石器（第14図1・4）がある。



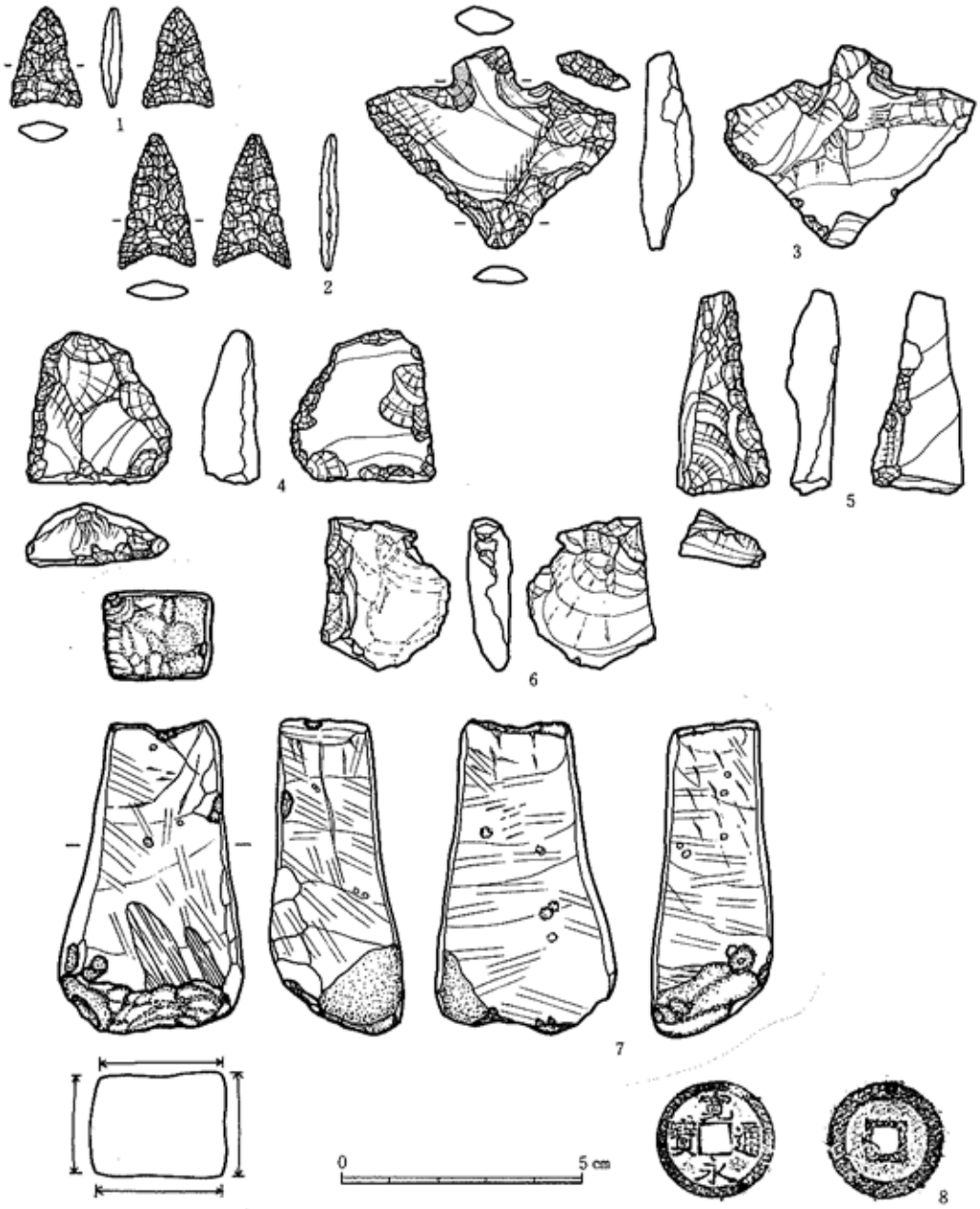
No.	出土層位	器種・器形	特徴	時期	型式
1	表土	縄文土器・深鉢口縁部	沈線による区画文＋棒状工具による連続刺突文・口縁部に刻目、内面に赤彩	早期末	鵜ヶ島台式
2	表土	縄文土器・深鉢口縁部	隆沈線文（横位渦巻文？）・不明縄文・内面ミガキ	中期後	大木8B～9
3	P3埋土	縄文土器・深鉢胴部	隆沈線文（横位渦巻文？）・不明縄文	中期後	大木8B～9
4	P4埋土	縄文土器・深鉢胴部	隆沈線文（横位渦巻文？）・RL縄文	中期後	大木8B～9
5	24号土壙堆積土	縄文土器・鉢形口縁部	外面：ミガキ、内面：口縁部に横位沈線→ミガキ	?	
6	29号土壙堆積土	縄文土器・底部	網代痕	?	
7	29号土壙堆積土	縄文土器・深鉢口縁部	RL・LR縄文	晩期	

No.	出土層位	器種・器形	口径cm	底径cm	器高cm	特徴（外面：内面：底部）		
8	表土	赤焼土器・坏		6.6		ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り・再調整なし
9	30号土壙堆積土	土師器・坏		5.4		ロクロナデ	ミガキ＋黒色処理	回転糸切り・再調整なし
10	30号土壙堆積土	土師器・坏	14.6	5.4	5.2	ロクロナデ　墨書	ミガキ＋黒色処理	回転糸切り・再調整なし
11	11号土壙堆積土	土師器・坏		6.4		ロクロナデ	ミガキ＋黒色処理	回転糸切り・再調整なし
12	26号土壙堆積土	土師器・甕	24.0			ロクロナデ	ロクロナデ	
13	29号土壙堆積土	土師器・甕		8.4		手持ちヘラケズリ	ヘラナデ	磨滅のため不明
14	P13埋土	中世陶器・擂鉢	27.8			内外ロクロナデ、内面下半に使用痕、無釉、瀬戸産（13～14C）		
15	P33埋土	古瀬戸・鉢類			3.2?	口唇部に細い凹み、内外全面に灰釉、瀬戸産（13C末～14C前半）		

第13図　土壙、ピット、表土出土遺物(1)



第10図　掘立柱建物跡、ピット群、土壙、およびその他の遺物



No	出土遺構・層位	器種	石材	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	備考
1	表土	石鏃	頁岩	20.4	14.3	4.0	0.8	
2	2号住居跡堆積土	石鏃	頁岩	27.4	15.5	4.5	0.9	
3	P19埋土	石匙	頁岩	41.3	51.0	10.5	14.0	つまみ部分に付着物（アスファルト？）あり
4	表土	スクレイパー	頁岩	31.7	29.3	11.2	10.9	破損後再加工・二重パティナ
5	2号住居跡堆積土	スクレイパー	頁岩	40.9	20.4	9.2	6.3	破損後再加工・二重パティナ
6	20号土壙堆積土	二次加工ある剥片	頁岩	30.9	25.2	8.1	6.3	
7	P48埋土	砥石	砂岩	65.9	37.2	25.0	87.3	使用面は下部を除く5面、研磨痕あり、上部に貫通孔？

第14図　土壙、ピット、表土遺物(2)

5．考　察

今回の調査において竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡29棟およびピット群、土壙34基、焼け面2基、溝1条が検出された。これらの遺構は、出土した遺物から縄文～江戸時代に属するものと考えられるが、金体的に遺物が少なく時期を特定できなかった遺構も多い。

竪穴住居跡

いずれの住居跡も削平が著しく住居構造等について不明な点が多いが、カマドの脇にピットを有するという点においては共通している。このことから、SX01とSK30についても住居を構成する施設の一部であった可能性が高く、遺構の分布はさらに調査区外に延びることが予想される。よって、これらの住居跡の配置と構成については不明であるが、SI02とSI03については遺物の接合関係よりごく近接した時期でのSI03→SI02という変遷が認められる。

住居跡の年代については、出土した遺物の特徴,すなわち①土師器がいずれも製作にロクロを使用していること、②赤焼土器を伴出していることから大まかには平安時代に位置付けられる。ただし、SI01とSK30において土師器坏が再調整のあるものとないものから構成されること、またSI01の堆積土中に灰白色火山灰が含まれることから平安時代の前半頃に属するものと思われる。

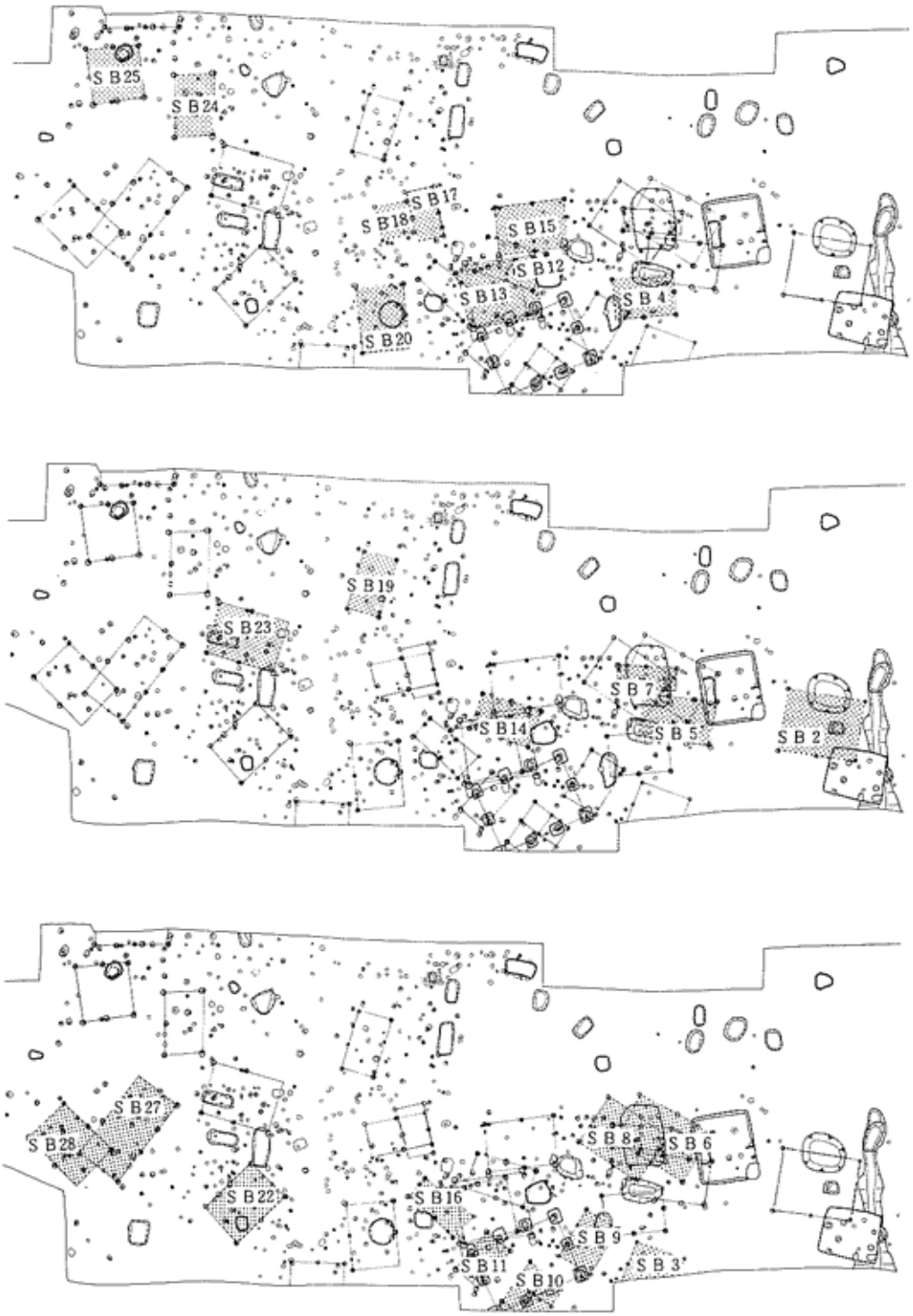
掘立柱建物跡

今回検出された29棟の掘立柱建物跡は、建物の規模および柱穴の特徴から2つの群に分けられた。

A群の建物群は、古代の掘立柱建物跡の特徴に類似しており、出土した遺物の中で土師器坏がロクロを使用していることから平安時代以降のものであると考えられる。また、古代には集落内にもこういった掘立柱建物が存在することがあることから、竪穴住居跡と同時存在していた可能性を指摘することもできる。しかし、SB01A→SB01Bという同位置での建て替えが認められるものの、建物としての性格や集落としての構成などについては不明である。

B群の建物群は、その規模や構成および配置に規則性を見い出すことはできないが、すくなくとも4期以上にわたって重複しているにもかかわらず、建物およびピット群の分布は遺跡の中でも平坦かつ高い所に限られており、場を意識した建物の占地が行われていたと言える。

ここで建物の方向性によって分類した各群（B①、B②、B③群）の建物の特徴についてみると、B③群において総柱式建物があることや建物の規模に若干のばらつきがみられること以外には特筆すべき特徴を見い出すことはできない（第15図）。ただ、これらの建物群は数期にわ



第15図　掘立柱建物跡群の方向別配図（上からB①、B②、B③群）

たり変遷していることから同じ性格を踏襲していたことが推測される。

建物群の年代については、それを示す直接的な遺物が出土していないため、個々の建物を具体的に位置付けることはできないが、SB01B→SB12という新旧関係よりA群に後続する建物群であること、建物の規模や柱穴の特徴が他遺跡で検出された中世～近世の建物群に類似していることから、この頃に属するものと思われる。また、これらの柱穴と性格的に一連のものと考えられるピットからは13～14世紀頃に比定される古瀬戸および県内産の中世陶器の破片が出土しており、これらの建物群の年代の一端を指し示すものと思われる（注）。

なお、封内風土記にその記載はみられないが、本遺跡が『サンビャクジ』という俗称で呼ばれていること、調査区の北側の畑には径1m程の集石?が6ケ所あったと言われていることや石組の井戸が現存していることなどから、この付近に寺が存在していたことも想定でき、その付属雑舎である可能性も指摘できる。

(注)古瀬戸および県内産の中世陶器の年代については、藤沼邦彦氏および多賀城市教育委員会の千葉孝弥氏に御教示頂いた。

土壙

今回の調査において34基検出された。これらは、その形態的特徴から4つのタイプに分けられたが、その時期や性格について明らかになったものは少ない。但し、SK21については、規模や形態、遺物の出土状況からみて江戸時代に属する墓壙であると考えられる。またbタイプに属する土壙群の中には、この他にも規模や形態からみて同様の性格を有すると思われるものがいくつかある（SK12・16・17・23）。

この他の土壙群については不明な点が多いが、出土した遺物から考えて縄文時代もしくは平安時代に属するものと考えておきたい。

6. ま と め

西前遺跡

西前遺跡は、段丘を開析して名取川に注ぐ岩ノ川の西側の緩斜面に立地している。調査の結果、遺構は検出されず、土師器の小破片が微量出土したのみであった。よって、今回の調査区は遺跡の範囲外であると考えられる。

町田遺跡

① 町田遺跡は、岩ノ川を挟んで西前遺跡の対岸の緩斜面に立地している。

② 調査の結果、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、中世～近世の掘立柱建物跡および多

数のピット群、江戸時代の墓壙などが検出された。また全体的に少ないが、縄文時代、平安～江戸時代に属する遺物がそれぞれ出土している。

③　平安時代には集落として営まれ、中世～近世には具体的な性格については不明だが、小規模な建物群が性格を変えず長期にわたって存在していたと推測される。

引用・参考文献

氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14号　東北史学会

加藤道男・阿部博志（1980）：「観音沢遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会

河原純之・中村撤也・松下庄司(1985)：「書院造の武家屋敷と町屋のにぎわい」『別冊考古学ジャーナル』№.251

黒川利司(1980)：「特長寺遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集　宮城県教育委員会

斉藤孝正他（1985）：『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅳ)瀬戸・藤岡(瀬戸吉窯跡群)』愛知県教育委員会

佐々木　隆（1987）：「仙台地域の地形地質」『広瀬川流域の地形地質調査報告書』仙台市科学館

佐々木安彦(1980)：「葉坂戸の内遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第65集　宮城県教育委員会

佐藤甲二・斉野裕彦他(1983)：「茂庭」『仙台市文化財調査報告書』第45集　仙台市教育委員会

佐藤　洋・斉野裕彦他（1982）：「北前遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第36集　仙台市教育委員会

須田　茂・義江彰夫(1987)：「群馬県東田遺跡の中世村落遺構」『日本歴史』第471号日本歴史学会

土岐市美濃陶磁歴史館（1984）：『美濃陶磁歴史館報Ⅲ』土岐市

中村　光一(1985)：「石巻城跡」『石巻市文化財調査報告書』第2集　石巻市教育委員会

真山　悟（1981）：「家老内遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集　宮城県教育委員会

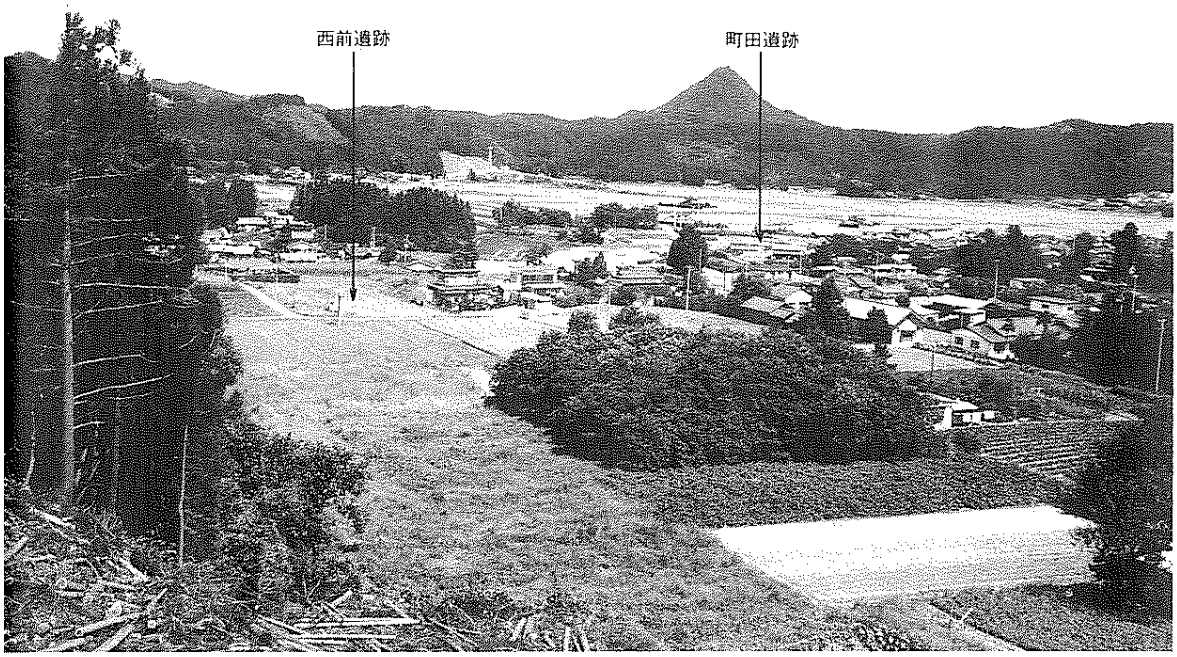
真山　悟(1981)：「東山遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集　宮城県教育委員会

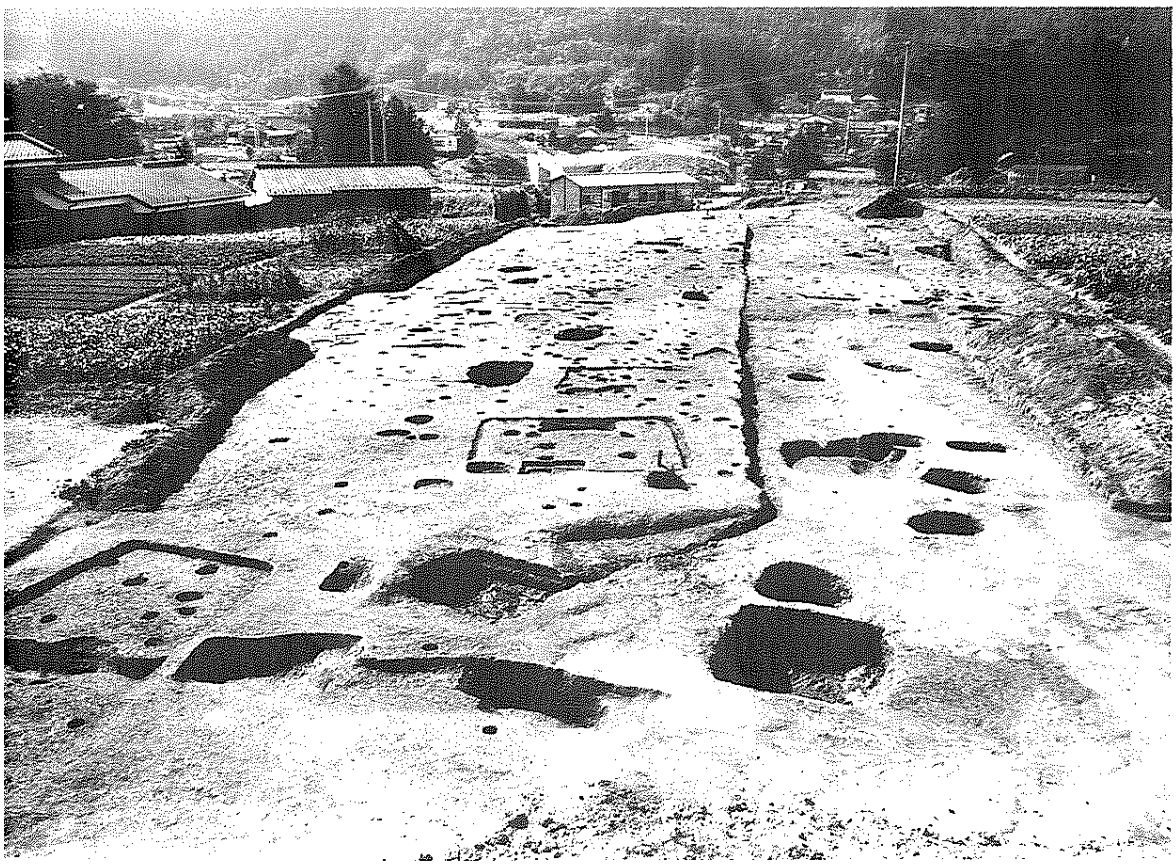
満岡忠成他編（1980）：『日本やきもの集成3－瀬戸・美濃・飛騨』平凡社

山田一郎・庄子貞雄(1980)：「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979』宮城県多賀城跡調査研究所

遊佐　五郎（1980）：「宇南遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』第69集　宮城県教育委員会

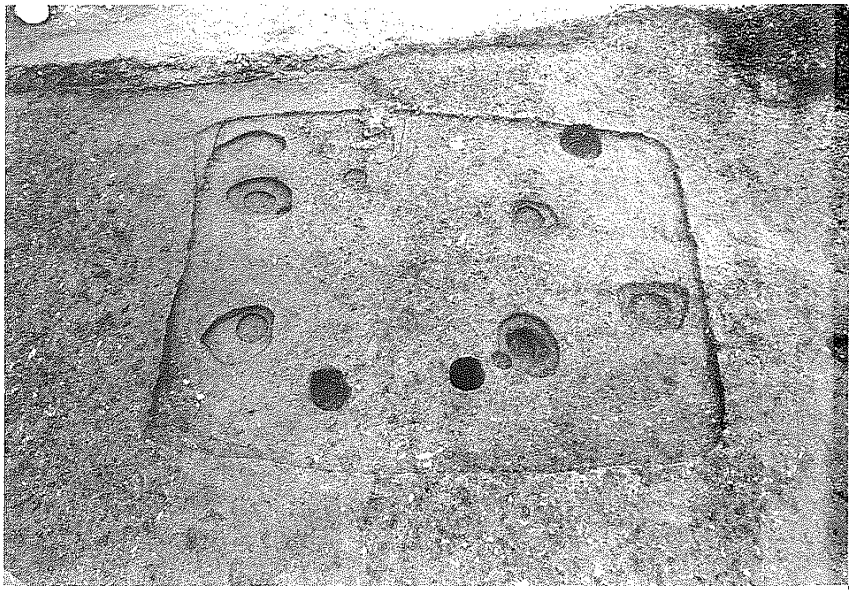
写　真　図　版



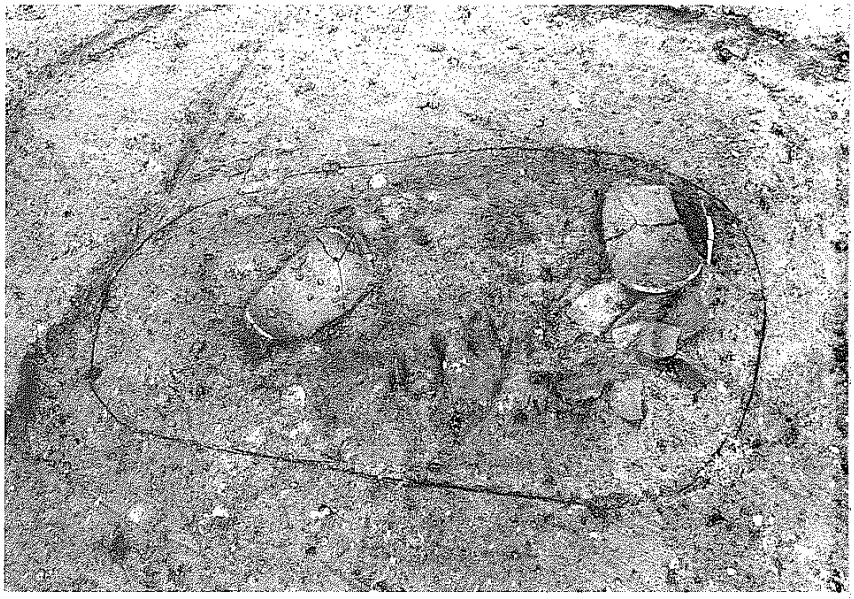


図版１　　上：遺跡遠景
　　下：町田遺跡調査区全景

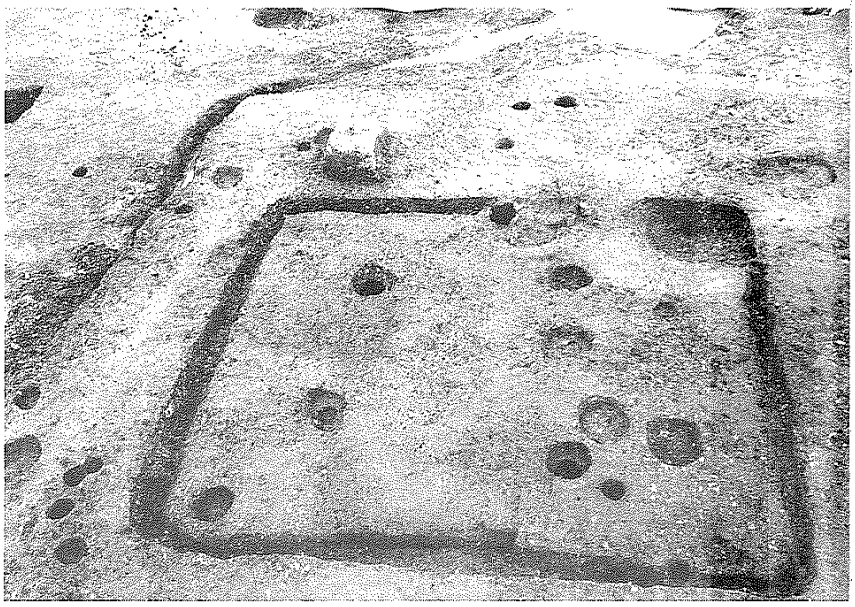
第１号住居跡



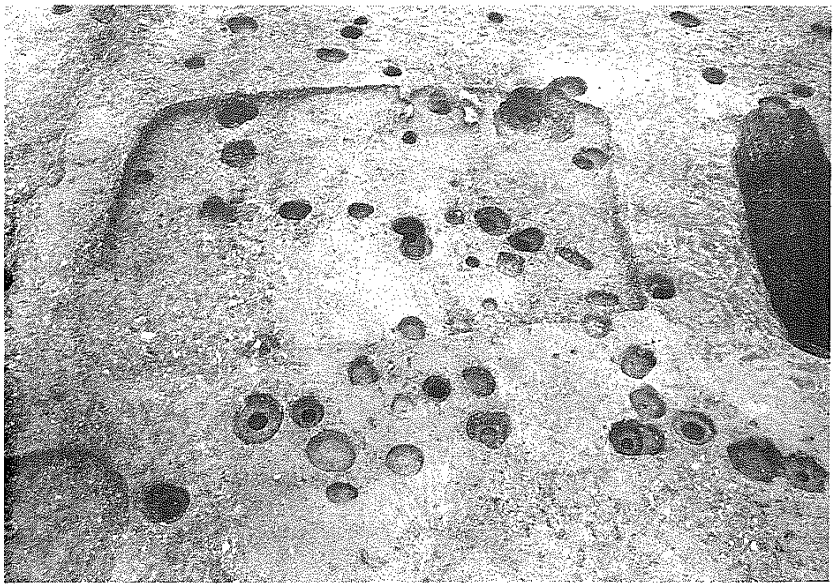
第１号住居跡
ピット遺物出土状況



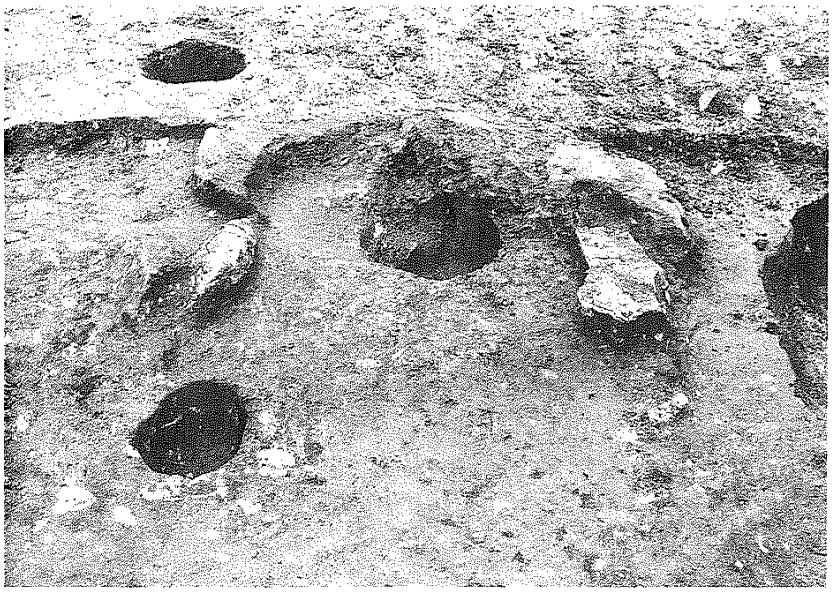
第２号住居跡



図版２



第３号住居跡

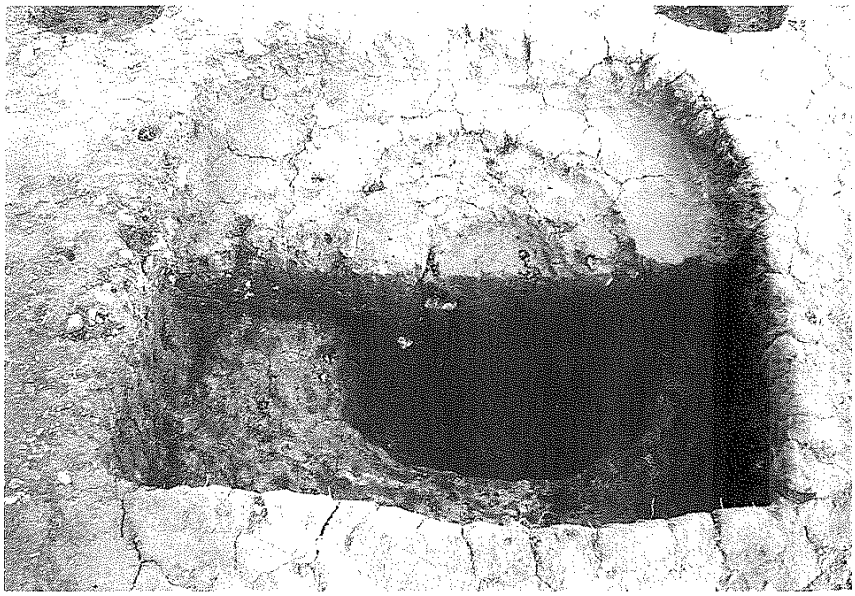


第３号住居跡
カマド

第１Ａ・Ｂ号
掘立柱建物跡

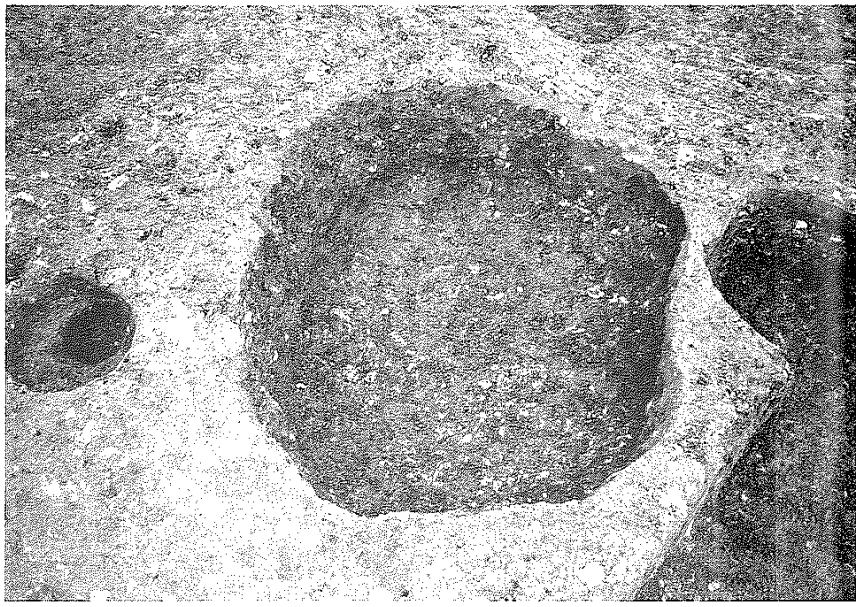
図版３

第１Ａ・Ｂ号掘立
柱建物跡柱穴

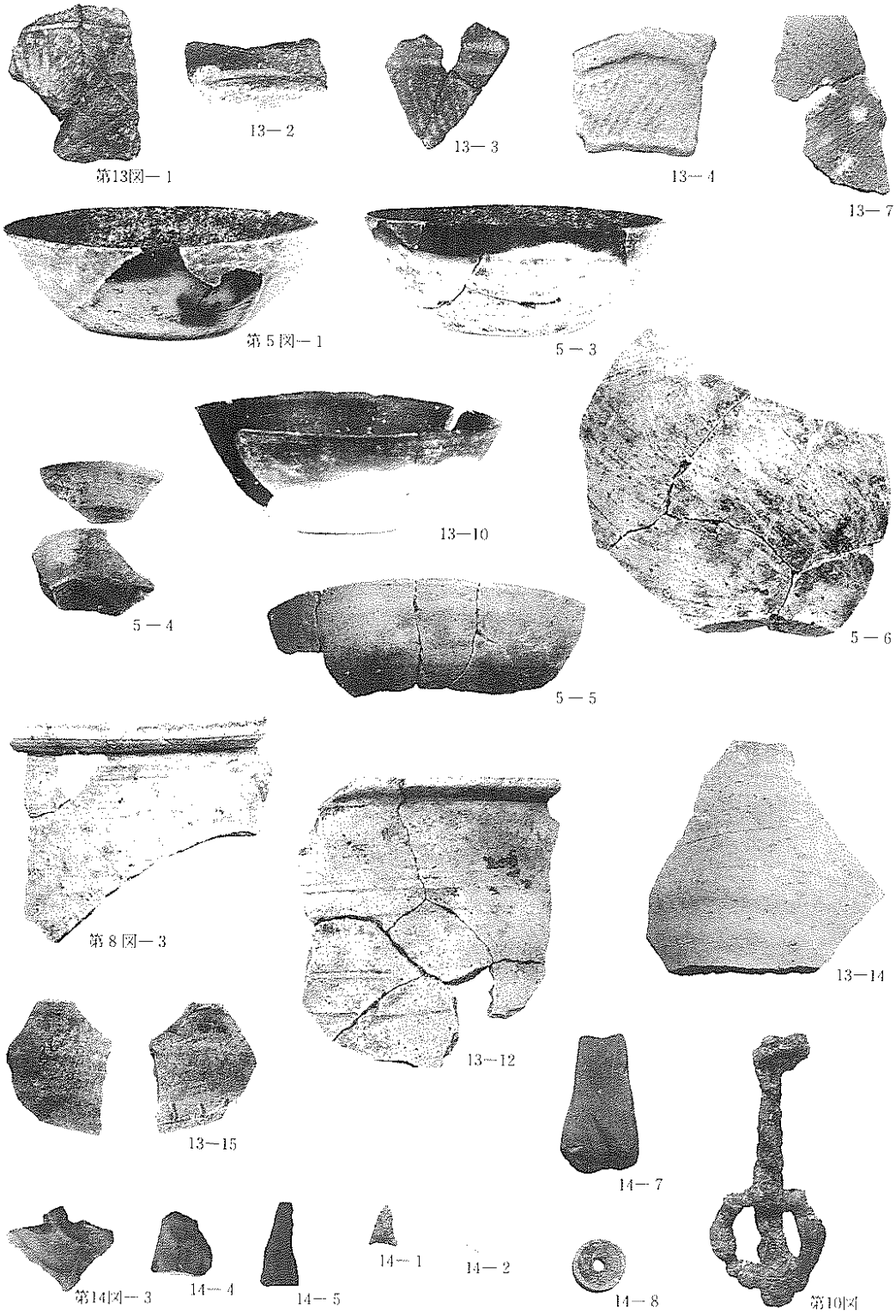


第20号土壙

第21・27号土壙



図版 4


第13図—1
13—2
13—3
13—4
13—7
第5図—1
5—3
13—10
5—4
5—6
5—5
第8図—3
13—12
13—14
13—15
14—7
第14図—3
14—4
14—5
14—1
14—2
14—8
第10図

図版5　出土遺物